ラカポシ南壁新ルート登攀におけるタクティクス

中　島　健　郎（関西学院大学山岳会）



ラカポシ南面ルート

① ラカポシ南面のルート設定とタクティクスについて

当初の計画ではパキスタン・ヒンドゥークシュ最高峰のティリッチミールへ行く計画であったが、出発日が近づいても許可が下りていなかった。パキスタンのことならよくあることだが、ティリッチミールはアフガニスタンとの国境で、登山隊への許可は近年出ていない。観光客向けに2019年から開放されたので、“おそらく大丈夫”との現地エージェント判断であったが、最悪の自体を考え、第二案をラカポシとして出発した。

ラカポシは北側のフンザ村から美しく見え名峰で、早稲田大と明治大が北面から登っているので日本人にも馴染みがある。登山記録はそこそこあるものの、南面からの記録は無い。カラコルム開拓期の1982年は南面の偵察へ入っていたようだが、登山の対象としては見られていなかったようだ。

登山許可がないまま現地入りするも、ラマダン（断食月間）明け休暇と重なり、役所が当分動かない。現在は山岳地帯の州都であるギルギットでもブリーフィングができるので、とりあえずラカポシの南面

の偵察へ向かう。ラカポシ南面はギルギットから最も近いダニョール谷から入って、トレッキング二日目にはベースキャンプへ到着できる。天候は良くなかったものの、壁の全容は見ることができた。予想通り雪が多く、上部には不安定なセラックがいくつも見受けられた。可能性のあるラインは見えたものの、第一印象は素直にトライしたいと思わせる内容ではなかった。偵察を終えてギルギットへ戻る道中、果たしてこの道を再び戻ることがあるのだろうか、と考えさせられる程であった。期待していたティリッチミールの許可は、まんまと裏切られ、結局ラカポシへの転進が決まる。

ラカポシ南壁が今まで残されていたのは、ただ目につきにくいだけでは無く、ルートの危険性にある。ひとたび雪が積もれば、どこも雪崩そうな斜面に加え、その先に潜むアイスセラック。本来ならば外的な危険要素を排除したルート取りを選ぶが、それが出来ないのがこの南壁であった。エベレストのアイスフォールのように全てフィックストロープが張り巡らせ、セラック崩壊でルートがなくなったとしても、直ぐに大勢のシェルパたちによって修復される環境とは訳が違う。小さな登山隊でフィックスしてルート工作したとしても、荷上げで時間がかかり、往復する度にルートの修復も必要になる。このような極地法に対して、今さら言うことではないが、アルパインスタイルにするだけで危険性が下がる。危険箇所はお互いにロープをつなぎ、スピードを上げる事によって少しでも滞在時間を減らす。単純な事だが、危険箇所で固定ロープを何往復しているよりは、コンテニュアスクライミングで1度通過した方が安全である。もちろん、一日中危険地帯を通過するようなルートや雪崩の発生する斜面は避けなければならないが、行動スピードで危険性をコントロールする事は可能である。

② アタックで持参した装備について

前述の通り、スピードをの意識した登山であるため、軽量化が肝となる。今回採るルートは、主に氷雪壁をつなぐルートである。その為、思い切って岩用の支点は持参せず、アイススクリューとスノーバーに限定した。ロープもダブルロープ7.1mm50mを１本のみ。食料は１食分１人前を２人で分けるぐらいだが、燃料を減らす事はしなかった。スピード登山と言っても、危険箇所の通過を短くするだけで、１日や２日の短期間で登るわけではない。標高差4,000mを一気に駆け上がる程の体力と技術があるわけではないし、7,000m後半の高所であるため天候も重要となる。したがって、軽量化と言いながらも、天候次第では粘る必要があったため燃料だけは削らなかった。

③ 実際の登攀について

順化では5,900mで１泊し、6,000mまでタッチはできたものの、天候悪化のため満足のゆく順応活動は出来なかった。そのまま悪天が長引き、降雪が落ち着いた時にはアタックのリミットが近づいて来たため、ベースキャップを追い出される形となる。

偵察と順応で採ったルートを辿るが、１週間空いただけでルートの状況は大きく変わり、下部はデブリが多く発生していた。クレバスはジャンプでなんとかやり過ごす箇所も多く、これ以上開いたら通行困難な場所も増えていた。基本的にはコンテニュアスクライミングで、たまにスタカットを交えてキャンプ1、キャンプ2と順調に高度を上げていった。

危険箇所の通過は天候の良い２日間に抜ける事が出来て、あと２日あれば山頂に届くところまで来た。予想よりも順調に来ていたのでキャンプ2で燃料と食料を少しデポして軽量化する。３日目には南東稜上の6,800mまで達するも、ここに来て天候は下り坂。

日本から衛星端末（inReach）に送ってもらった天気予報はどう考えても翌日から崩れると示していた。一旦立て直す程の時間はないので、ここで停滞して悪天をやりすごすことにする。今朝デポしてきた食料をさっそく後悔する。翌日、翌々日と相変わらずの悪天で動く気になれず、唯一の希望は悪天の後には好天が来ると信じること。３泊目の夜には突如嵐がやって来たと思ったら１時間吹き荒れて去る。すると不思議な事に、その後は今回の登山期間中で最もクリアな満天の星空となった。

翌朝冷え込む中ヘッドライトの明かりで出発。南東稜から南稜へ合流するまでは深い雪のラッセルが続く。合流点から頂上稜線は一部岩稜になっており、まさかここで岩登りギアが必要だったのか、と一瞬危ぶまれたが、他のルートを探していると、一段下降すれば大きく迂回できるルートが見つかり一安心。西側斜面に大きく迂回して、ズボズボ埋まるモナカ雪ラッセルで頂上直下まで達する。

岩混じりのピークを乗越すと、いきなり北壁がすっぱり切れ落ち、今まで見たことのある懐かしい世界が広がっていた。目の前には一昨年登ったシスパーレやウルタル山群、眼下にはフンザやカラコロムハイウェイが良く見える。12:00そこが山頂であった。山頂は岩場で、人が一人がやっと立てるスペースであった。遠くにはK２が見えるほどの快晴に恵まれた。

④ そこで求められた技術について

今回求められたものといえば、卓越な登攀技術などでは無く、このルートを見つけ、実際に取り付いたことだろう。以前なら見向きもされなかったルートに、自らの発想でラインを引いて、リスクを天秤にかけて登ると判断したこと。あとはスピードを上げるための軽量化や、パートナーとの信頼感はもちろん言うまでもない。基本的に行動はコンテニュアスクライミングなので、お互いの技術や能力を理解し、それに見合った場面でトップを交代したり、セカンドに徹したり臨機応変に対応する。テント生活での水作りですらいつも役割が決まっている。

⑤ 日本で行っている山行や経験がどのように反映され生かされたか

近年、正直なところ国内では大した登山はほとんどしていない。パートナーの平出とも国内でロープを結ぶ事はまずは無いため、各自のトレーニングに委ねている。トレーニングと言っても走ったり自転車に乗ったりするぐらいで、あとは夏場は岩登り、冬場は冬壁や山スキーを少しするぐらい。以前は少しでも高所順化出来ればと考え、出発前に富士山を登り込んでいた事もあったが、今やそれも無くなった。

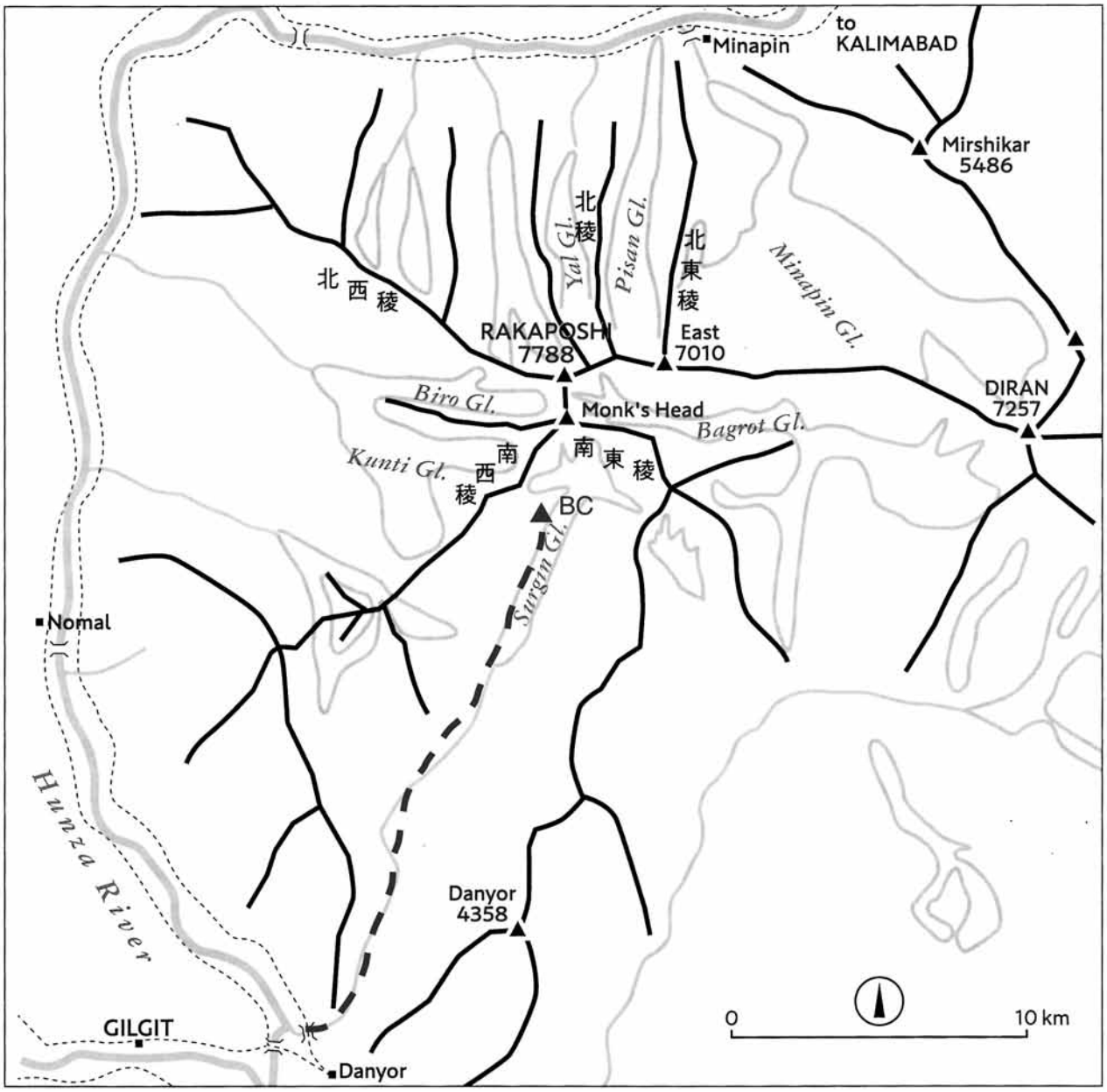
⑥ 今後さらに高みを目指す際のポイントや反省点

海外遠征と言うと、なんだか大げさに聞こえるが、自分にとっては国内登山をする延長線にある。と言っても費用や時間が通常よりもかかるのは事実であり、パートナーの問題もある。それら一つ一つが重なれば、海外の登山などやらないのが一番である。それでも、その山に向かうだけの意志と覚悟があれば、何とかやりくりしようともがくのが、どうしようもない我々クライマーである。

かく言う私も、昨年子どもが二人に増え、今までと同じようには行かなくなったのも事実。そこでどうするかがこれからの自分にかかっている。

今回の反省点は、もう少し出発前に情報を集めて、許可の出る出ないをクリアにするべきだった。一縷の望みがあればそれに賭けたい気持ちで望んだものの、もう少し待って天候悪化に更に捕まれば、ラカ

ポシすら挑戦できなかった可能性もあっただろう。しかし、二人だけの登山隊でフットワークが軽かったゆえ、このような臨機応変の対応ができたのも事実。ある意味、それほどの準備をせずに望んだ山であったので、全てが新鮮で楽しめた。



ラカポシ概念図